

階級闘争の客観主義 ——階級の利益と変革の力——

……そこで、この「日和見主義の論理」に立ちいってみる必要がある。

これこれの階級が新しいロシアを建設するとかたる者は、きわめてしっかりとマルクス主義の基盤のうえに立っているのであって、だから、エヌ・ニコリンの立腹した文句だけでなく、……「解党派統合」会議でさえも、また彼らのどのような言葉の「とどろき」も、この人を動揺させることはできない。

「だれかが新しいロシアを建設するわけではない。それは……建設されるのである、うんぬん」とかたる者は、階級闘争の客観主義から（すなわちマルクス主義から）現実のブルジョアの弁護の「客観主義」へ転落するものである。まさにここに、エヌ・ニコリンが（自分では気づかずに）陥っているマルクス主義から日和見主義への墮罪の源泉がある。

もし私が、たとえば真理だの、公正だの、勤労の平等などという見地から、まさにこれこれのやり方で新しいロシアを建設しなければならない、と言ったとすれば、それは、私を妄想の世界へつれていく主観主義であろう。実際には、新しいロシアの建設を決定するのは、私の最良の願いではなくて、諸階級の闘争である。新しいロシアを建設しようという私の理想は、それが、生活条件からしてどうしても一定の方向にむかって行動せざるをえない、現実存在する階級の利益を表現するばあいにだけ、妄想でなくなるであろう。私は、この階級闘争の客観主義の見地に立ち、すこしも現実を弁護しないで、反対にこの現実そのもののなかに、それを改造するもっとも深い源泉（一見しただけでは目につかないけれども）と力を指摘するのである。

また、もし私が「だれかが新しいロシアを建設するわけではない。それは、さまざまな利害の闘争のなかで建設されるのである」と言ったとすれば、私はそれによってすぐさま、これこれの諸階級の闘争の明瞭な情景にある種の蔽いをかぶせ、また支配階級すなわちとくにブルジョアジーの、表面にあらわれた行動しか見ない連中に譲歩することになる。私は心ならずも、ブルジョアジーを弁護する立場に転落し、階級闘争の客観主義のかわりに、もっとも目だっているか、あるいは一時成功しているブルジョア的傾向を、自分自身の基準としてとりあげることになる。

歴史の分野からとった例によってこれを説明しよう。新しいドイツ（19世紀後半のドイツ）は、さまざまな利害の闘争の過程で「建設された」。教養ある人々のうち、ただひとりのブルジョアもこれに異論をさしはさむものはないであろう、——だが、彼はそれからさきへはすすまないであろう。

ところで、マルクスは、新しいドイツの建設のもっとも「岐路的な」時期に、つぎのように考察した。

1848年に、マルクスはつぎのように書いた。——「大ブルジョアジーは、以前から革命に反対であったが、いまや、人民、すなわち労働者と民主主義的ブルジョアジーとをおそれるあまり、反動派と攻守同盟をむすんだのだ」〔選集、第3巻、37ページ〕。「1789年のフランス・ブルジョアジーは、彼らの同盟者である農民をかたときも見すてなかった。彼らは、自分の支配の基礎が、農村の封建制を破碎し、自由な、土地をもつ農民階級をつくり出すことであるのを、知っていた。

1848年のドイツ・ブルジョアジーは、彼らのもっとも自然な同盟者であり、彼らの肉親中の肉親であり、それとむすばずには彼ら自身が貴族にたいして無力であるこれらの農民を平然と裏切る。

封建的諸権利の存続、……これが、1848年のドイツ革命の成果である。泰山鳴動してねずみ一匹とはこのことだ！」〔同、97～98ページ〕。

マルクスにあっては、新しいドイツを**建設した諸階級**がただちに、生きたものとして立ちあらわれてくる。

「客観主義」の名において現実を弁護するブルジョア学者はこう言う、ビスマルクはマルクスにうち勝った。ビスマルクは、「さまざまな利害の闘争の複雑な過程で、新しいドイツが**建設された**」ことを、考慮にいれた。ところが、マルクスは、自由主義者にさからい、労働者と民主主義的（反動派との同盟に応じない）ブルジョアジーとの勢力によって、大ドイツ民主共和国を「建設しようという妄想計画に没頭した」と。

ブルジョア学者たちは、ほかならぬこのことを、いろいろな調子で述べている。この問題を純理論的に考察するにあたって、われわれは、彼らの誤りはどこにあるのか、とみずから問うてみよう。それは、階級闘争をおおいかくし、ぼかしていることにある。それは、彼らが、ビスマルクのドイツは、その「変節と裏切り」のために「貴族にたいして無力」となったブルジョアジーによって建設されたという真実を、（ドイツは、……過程で**建設された**などという、一見して深い意味をもつかのような言いまわしで）あいまいにしている点にある。

だが、階級闘争の客観主義によって、マルクスは、**政治的現実**を百倍もよりふかく、より正確に理解することができ、この政治的現実をけっして弁護せずに、反対に、この現実のなかに、民主主義ドイツを建設したほかならぬその諸階級、ビスマルクにとってきわめて好都合な諸事件の転換のさいにさえ、民主主義と社会主義のとりでとなることのできた、ほかならぬその諸階級を指摘し、別にとりだしたのである。

マルクスは、政治的現実をきわめて正確に、きわめて深く理解していたので、半世紀もまえの1848年に、ビスマルクのドイツの**本質**を評価した。すなわち、それは「貴族にたいして無力な」ブルジョアジーのドイツである、と。マルクスがこの評価をくだしてから64年を経た1912年の選挙で、この評価が正しかったことは、自由主義者たちのふるまいであますところなく確証された。

マルクスとマルクス主義者は、1848年いらい自由主義者と仮借ない、前代未聞のはげしい闘争、自由主義者の全般的な号泣（親愛なニコリン、荒々しい表現をゆるしてくれたまえ！）を呼びおこした闘争を行ったが、彼らが、大ドイツ民主主義国家の「計画」を主張したとき、けっして「妄想」の人ではなかった。

その反対に、マルクスとマルクス主義者は、この「計画」を主張し、それをたゆみなく宣伝し、この計画を裏切った自由主義者と民主主義者を痛烈にむちうつことによって、「新しいドイツ」の**生きた力**をひそめもっているその階級、マルクスの首尾一貫した、断固とした献身的な宣伝のおかげで、いまや、ビスマルク的ブルジョアジーだけでなく、一般にあらゆるブルジョアジーの墓掘人としての自分の歴史的役割をはたす用意をととのえて、完全に武装して立っているその階級——まさにその階級を教育したのである。

注) ……は本文中の略、………は青山の略 第18巻 P350~353『政治方針について』

ポイント

もし私が、たとえば真理だの、公正だの、勤労の平等などという見地から、まさにこれこれのやり方で新しいロシアを建設しなければならない、と言ったとすれば、それは、私を妄想の世界へつれていく主観主義であろう。実際には、新しいロシアの建設を決定するのは、私の最良の願いではなくて、現実に存在する階級の利益に基づく諸階級の闘争である。この現実に存在する階級の利益を表現するばあいだけに、私の理想は妄想でなくなる。私は、この階級闘争の客観主義の見地に立ち、すこしも現実を弁護しないで、反対にこの現実そのもののなかに、それを改造するもっとも深い源泉と力を見るのである。

「客観主義」の名において現実を弁護するブルジョア学者はこう言う、ビスマルクはマルクスにうち勝った。ビスマルクは、「さまざまな利害の闘争の複雑な過程で、新しいドイツが建設された」ことを、考慮にいれた。ところが、マルクスは、自由主義者にさからい、労働者と民主主義的（反動派との同盟に応じない）ブルジョアジーとの勢力によって、大ドイツ民主共和国を「建設しようという妄想計画に没頭した」と。

ブルジョア学者の誤りはどこにあるのか？ それは、階級闘争をおおいかくし、ぼかしていることにある。それは、彼らが、ビスマルクのドイツは、その「変節と裏切り」のために「貴族にたいして無力」となったブルジョアジーによって建設されたという真実を、（ドイツは、……過程で建設されたなどという、一見して深い意味をもつかのような言いまわしで）あいまいにしている点にある。

だが、階級闘争の客観主義によって、マルクスは、政治的現実を百倍もよりふかく、より正確に理解することができること、プロレタリアートこそ歴史の推進者であることを示し、彼らを教育した。